

知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe

(法政大学教授)

第①回「対話」——コミュニケーションがうまくいかないのは、話し下手だからと思っていませんか？

思 春期にさしかかると、話し下手だからと悩む子どもたちが増えていきます。たいてい、「人と話すのが苦手」「『空気』を読むことが苦手」といった気持ちにさいなまれます。そのため、対話どころか、難しいことを話し合おうという雰囲気 of 授業は、はなから逃げ腰になります。ですが、実は話し下手の問題は「話すスキル」「空気を読むスキル」が苦手というよりは、むしろ「注意」を共有するという「共同注意」の力がまだ弱いからかもしれません。

コミュニケーションの大本は「共同注意」の力

先生が授業中に黒板に何か書き始めると、生徒が一斉にそこに目をやります。これが「共同注意」です。同じ空間の中で、人が他の人と同じようにモノ・コト・人に対して一斉に注意を向けることを指します。さらにいうと自分が他の人と同じように、その対象に対して注意を向けていることを知っている状態ともいえます。

こうした力は、赤ちゃんの時から発達します。下図のように、**1**赤ちゃんは親とアイコンタクトを通わせながら、しだいに、**2**相手が何に注意や関心を向いているかを共有するようになります。やがて、**3**相手が何を見ているかに注意がいき、さらに相手が見ている対象に自分の注意を向けるようになります。赤ちゃんは、言葉を獲得すると、指差しながら「ワンワン」と

対象に注意を向けたことを表現するようになります。その際、親が「ワンワンだね」と応答してやると、赤ちゃんは、親といっしょに対象を共有している三角形の世界（これを「三項関係」とよんでいます）を認識するようになります。このように関係を認識することは、信頼や共感につながる感情を共有することにつながります。これが「共同注意」の本質です。

対話を成立させるために

道徳の授業では、「対話」が重要な活動になります。対話を成立させるためには、この共同注意の力は、どの年齢であっても欠かすことができません。相手が何に注意を向けているか、それを共有することが対話の前提となるからです。ですから、相手の話に耳をそばだて、相手が関心を向けようとしていることを能動的に共有しようとする姿勢を育てることが大切なのです。

子どもたちに対話を促すとき、「今、〇〇ちゃんは、△△に関心を向けているね。」と先生が声をかけることは、この力が未熟な子どもたちにはたいへん効果的な支援になります。そして、共感する力も育てます。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』（筑摩書房）、『子どもの「10歳の壁」とは何か？ 乗り越えるための発達心理学』（光文社）など。監修に『まんがでわかる発達心理学』（講談社）など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。

